The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	仕切り三兄弟
Author(s)	岩根, 久
Citation	Gallia. 2020, 59, p. 154-155
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77099
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

仕切り三兄弟

岩根　久

仕切り三兄弟とは、昨年退職された北村卓先生、そして今年退職する和田章男先生と岩根のことである。三人は何かと世話役をすることが多く、私は心のなかで密かに仕切り三兄弟と命名している（ここでは披露しないが、「だんご三兄弟」の替え歌も作っている）。

冒頭の段落では先生の敬称をつけたが、学生時代からの40年を超えるお付き合いなので、これ以降、北村さん、和田さんとさせていただく。三人とも1954年生まれで、生年月日を順に並べると、3月北村さん、6月岩根、同じく6月、1週間遅れで和田さんの順になる。

鍋の仕切りでは三人三様だ。北村さんはいつも周囲の人に気を配っている。宴会の鍋のときでも気配りは相変わらずで、具材に火が通る丁度いい頃合いで、同席者の小皿にさりげなく入れていく。和田さんの仕切る鍋は彩りも具材の配置も美しい。刻々と変化する鍋の状況を見ながら、巧みな箸さばきで、具材をその然るべき位置に収めていく。私の鍋はというと、ひたすら最後の美味しい雑炊を目指す。雑炊に至るまでの鍋は、スープをつくるための過程に過ぎないと考えて、具材の入れ具合を塩梅する。

当時阪大文学部仏文の最大の行事であった、大阪大学和具臨海宿舎（三重県志摩町和具座賀島）の合宿に最初に誘ってくださったのは北村さんだった。北村さんが、宿舎の予約、近鉄特急の予約、買い出し等々のことを一手に仕切っておられ、毎年和具にご一緒するうち、私も見様見真似でやり方を覚えた。その後、和田さんが大阪外大から阪大に入学され、和田さんがフランスに留学されるまでの間、毎年一緒に和具に行った。昼は水泳、卓球、夜はフォークソングやその他色々今となっては懐かしい歌を歌いながら海辺で飲み明かすという、まさに素晴らしい青春のひとコマだった。今でも記憶に鮮明に残るのが、真っ暗な海をバックに

ギターを抱えた和田さんが、自作の歌を披露して下さったことだ。確かサビのところは「逆さまに回る……、鏡の中……」だったか（間違っていたらすみません）。そのとき、遊園地にある鏡張りのびっくりハウス！？と思ったのを覚えている。

また和具で思い出に残るのは、座賀島一周の遠泳だ。座賀島は周囲が１キロ余りの島で、だいたい１時間くらいかけてゆっくり一周する。浅瀬の岩や真珠の養殖の筏のロープについた貝殻で怪我をする危険があるため、遠泳には先導がつき、前方の障害物の存在をボートの上から指示し、遊泳者を安全に導く。私が最も信頼を置いた先導者は和田さんだった。和田さんの先導で危険を感じたことは一度もなかった。ときに、船上のおしゃべりに夢中だったり、障害物を見落として誤った指示を出したりして、遊泳者を危険にさらす先導者もいたのだが。

学生生活の様々な局面で北村さんとご一緒し、お世話になったことは前号のガリアに書いたが、和田さんについてもそれは同様で、またそれに加えて、留学中も大変お世話になった。パリに到着したとき、すでに留学していた和田さんは、早朝にもかかわらずシャルル・ド・ゴール空港まで迎えに来て下さり、午前中の留学手続きにもつきあって下さった。そのあとシャトレのカフェのテラスで飲んだパナシェの味や、お宅（パリ国際大学都市プロヴァンス館）でいただいたロールキャベツの味は忘れられない。また、留学中、パリ国際大学都市日本館に居住することになったのだが、当時同館にお住まいであった、現在九州大学名誉教授の吉井亮雄さん・淳子さんご夫妻を紹介いただき、このご縁は留学中だけではなく、今もなおずっと続いている。

北村さんについての懐かしい記憶が数知れないように、和田さんの記憶も次から次へと泉のように湧き出てくる。しかし、このくらいにしておこう。昨年、北村さんを見送ったように、今年は和田さんとともに枝を飛び立つ。この場をお借りして、これまでお世話になった先輩の皆様、同輩の皆様、後輩の皆様に、心からの感謝を捧げたいと思う。